

←
現在の筑波山。右峰が女体山(877m)、左峰が男体山(871m)。中腹の「筑波山神社」周辺にはホテルなどが立ち並んでいます

←
関八州の重鎮「筑波山」全景(戦前)。麓にはゆったりと時間が流れ、のどかな草葺き屋根の農村風景が広がっています(『ポケットブックス アンティーク絵葉書専門店』より転載)

平成25年1月15日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会

筑波の山のいや高く

「沃野一望数百里 関八州の重鎮としてそそり立ちたり筑波山」と、土浦中学校時代から、生徒達によって高らかに歌われ続けてきた筑波山。そればかりでなく、朝な夕なに真鍋台の校舎から仰ぎ見る筑波山は格別な存在であり、これに挑みたくなるのは、ある意味でごく自然なこと。今号は、浩然の気を養うべく、たびたび行われてきた筑波登山行について取り上げてみます。

筑波に挑む土浦中学校生

旧制土浦中学校では、開校3年目の明治32(1899)年から修学旅行が始まり、一・二年生は筑波登山(1泊2日)。三年生は1日目が石岡・岩間から笠間へ(泊)。2日目は笠間から水戸線で岩瀬まで乗車。さらに岩瀬から雨引山、加波山を縦走し、筑波山で一・二年生と合流(泊)。翌日、3学年そろって大曾根、一の矢を経て帰校しています。

聖明治33(1900)年には、それぞれ5泊6日の行程で、四年生が鎌倉・横須賀方面、三年生は日光方面。二年生は霞ヶ浦周回で、これは土浦から汽船で行方井上寄航場まで行き、麻生(泊)、潮来、鹿島(泊)、香取、佐原(泊)、佐倉、成田(泊)、印旛沼、龍ヶ崎(泊)、女化を経て、牛久から汽車で四年生と合流し土浦に戻っています。一年生は筑波山・水戸方面で4泊5日。筑波、真壁、笠間、大洗に宿泊しています。

5学年がそろった明治34(1901)年は、五年生が松島・仙台、四年生が鎌倉・横須賀、三年生が日光、二年生が鹿島・成田、一年生が筑波・大洗となっています。

こうして筑波登山は一年生修学旅行のお決まりのコースになっていきました。一方で汽車や船の便がない区間はすべて徒歩。4泊5日または5泊6日の日程はかなりの強行軍であったと思われれます。

ところで、余りにも身近で、多くの人々を魅了し、万葉の代から歌にも詠まれてきた筑波山には、土中生は修学旅行だけでなく、個人やグループでもしばしば訪れていました。明治31(1898)年の夏休みには、先生と二年生3名が筑波町の個人宅を借り受け、約半月間、植物採集を行

っています(『進修』第1号・明治33(1900)年発行)。その後、「修学旅行記」、「筑波山に遊ぶ記」、「筑波山の初日の出」等々、多数の作品が『進修』誌上を飾っています。そのなかで、高田保(大正2(1913)年卒・中12回)が、三年生の時に寄稿した「筑波登山」(『進修』第14号・明治44(1911)年3月発行)は、出色の出来栄で、後年の筆の冴えをうかがわせる作品となっています。ここでは保の筆をたよりに、筑波登山の様子をたどってみます。



荘厳な筑波山神社拜殿(上)。かつては石段の路がここから始まっていた一の鳥居(左)

「筑波登山」

三年 高田保

「秋が来た。三年生の修学旅行方面は、日光前橋と定まったさうだ。足尾から大間々まで12里、しかも崎嶇(きく)たる山路を突破せねばならぬのだ。

『男だよ。歩けなくてどうする!』

力んでは見たが、さて、関東平野に産聲(うぶこゑ)あげて、山と云(い)や筑波の紫を仰ぐより外、何んにも知らぬ連中のこと、内心聊(いささ)か心細き感ありといふわけで、先ず足試しとして筑波山神に詣(も)うづるの計畫(けいかく)が起(お)こった。勿論(もちろん)、僕

等のことだ。平凡な宿屋の厄介になるようなり旅行じゃない。頂上に泊まるんだ。五軒茶屋で夜を明かそうといふのだ。」
「破天荒(てんぱくわう)、人は許さぬかも知らぬが、僕は自ら許して、破天荒の快挙といふ。いや頑張る。が然し、時節柄(ときせがら)南極探検の向ふを張るかと同達(どうたつ)えられては、清まぬから取り下げようか。」



1715年に建立され、1798年に再建された北条の「つくば道」道標(上)。神郡集落を貫通する「つくば道」(右)

明治43(1910)年10月8日土曜日、真鍋台の北(吟吉)先生のお宅に三年生19名、二年生1名が集合。北先生、西尾(頼造)先生の引率のもと、一行は高岡、藤沢を経て、午後5時、北條尋常小学校に到着。茶湯を戴き、持参の弁当で腹ごしらえを済ますと、北条から神郡(かんごおり)を抜けて一の鳥居に至る、古来からの登山道をたどっていきます。

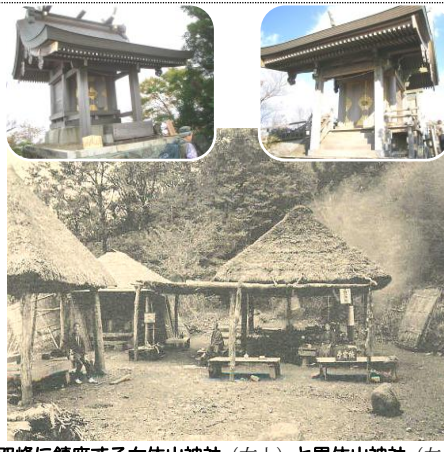
「提灯(ていとう)を振り翳(かざ)して筑波に向ふ。軍歌(ぐんか)の聲(こゑ)張り上げて元気のよいこと、田井(たゐ)、神郡(かむぐん)の村々は、子供等(こどもら)があたふた飛び出して眺(なが)めてる。」

一の鳥居から石段続きの路を一気に駆け上ると筑波の町。外交上手の北先生が交渉の結果、五軒茶屋の主人父子が同行してくれるとのこと。筑波山神社の社

殿に額（ぬか）づき、山に入ると吹き上げる風が強くなるも、一行はすこぶる元気。

「箱根の山、進め矢玉のやれ何の歌かの歌から、果てはぐるぐるまいたほうに至るまで、喉（のど）も裂け、山も崩れよ計（しきり）に怒鳴って行く。山怪（さんかい）山に住む妖怪（えんま）もうみ・水に住む妖怪（みづま）も魂消（たまげ）たろう。」

『オーイ』
歌の絶え間には前者後者相呼び相應じて、深い深い闇から闇へ、山響（やまびこ）を傳へるのだ。」



双峰に鎮座する女体山神社（右上）と男体山神社（左上）。その間の御幸ヶ原に、かつてはあった五軒茶屋（下、『ポケットブックス アンティーク絵葉書専門店』より転載）

男女川（みなのがわ）で新しい草鞋（わらじ）にはきかえ、胸突八丁を上りつめると、五軒茶屋（現在のケーブルカー・筑波山頂駅がある平坦地は、男体山・女体山の二神が御幸（往来）する「御幸ヶ原」とよばれ、かつてここには、依雲亭・迎客亭・遊仙亭・向月亭・放眼亭の5つの茶屋があり、夫婦餅と田楽豆腐を販売していました）。腰を下ろした時は10時近く。掛け茶屋の爐（ろ）を囲んで爺さん（五軒茶屋依雲亭主人）の咄（はなし）に耳を傾けているうちに、山頂の夜は雨と風とに更けていき、爐邊（ろへん）の団らんも一人二人と欠けていきました。

翌朝になると、「眼が覚めたのは4時近く。吹くは吹くは、降るは降るは。横擲（よこなぐ）りに熊笹の圍（かこい）を打ったたくのは雨。天の吼（さけ）び、地のどよめき。山の飛ばぬが勿怪（もつけ）の幸い。」

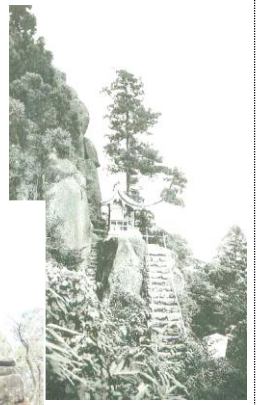
暴風雨のような悪天候。しかし、夜が明けると、風雨は多少収まり、周囲は雲の中。

「夜が明けたか外が白い。扉を推して見ると、アツ白い海！ 白い海！ 雲が飛ぶどころじゃない。一面はただ見る、雲の海！ 雲の乾坤（けんこん）。」

爺さんが、焼いてくれた夫婦餅を空きつ腹におさめて、先ず男体山、雲ただ漠々（ばくばく）。一行は離れ小島に取り残されたロビンソンクルーソーのおもむき。ついで女体山に向かう。頂上にたどり着くと、そこも雲の中。

「海の中か、地の底か、天の一隅か。混沌（こんとん）たる閑閑（かひやく）以前の世のさまか。巖頭（がんとう）に巖立（ざりこ）して、静かにこの雄大極まる漢々の偉親絶親に對した心こそ、於戯（あめ）これ真に吾我の眞境であつた。『辨（べん）ぜんと欲してすでに言を忘る』。陶淵明は千年も前に、我等の剎那（せつな）の心情をいふた。實際、何といつて宜（よ）いか判らなかつた。」

好畫圖（こうがず）！ けれども神に非ずして誰かこれを描くべき靈管（れいかん）靈妙なる筆（ふで）を有（も）つて居ようぞ。繪（え）や畫（が）い。矢張、大自然だ。藝術を超越した絶対的の力を有する景色だ。人間の智慧や、細工や、理窟（りくつ）や、是等の何を以てしても、冷やかき科学の力では、此の中に包まれた神秘の扉を開くことが出来ないだろう。況んや。戀（こい）を致（いた）ひ人生の倦怠（けんたい）をいふ文士に於いてをやだ。」
一行20有余人は、恍（こう）として一言も発せず、大自然と一つになつていました。しばらくの後、一行は大声一声、



現在の高天原。北先生が逆立ちをしたのは、この中央にある巨岩の上なのでしょか



→ かつての高天原（『ポケットブックス アンティーク絵葉書専門店』より転載）

山神の靈に別れを告げて、下山の途に。途中巨岩が屹立（きつりつ）する高天原へは、北先生が真つ先に登られ、その頂きのとっぺんで逆立ちをやつてのけられました。弁慶七戻り（べんけいしちもどり）を過ぎ、10時に近い頃、一行は塚田屋という宿屋の2階にくつろぎ、朝飯を済ませて、11時半にその宿を出立。北条、小田、藤沢と疲れた足を引きずつて、八坂神社の森陰に、校舎の高い塔を見たときには、ほつと一安心。振り返ると、筑波の紫は、一行を見送りながら、高く蒼穹（そうきゆう）を摩（ま）してそびえていました。



弁慶七戻り（「石門」）。豪傑の弁慶でさえも、頭上の岩が落ちてくるのでは、と、7度も後ずさりしたといわれる。「名所スポット」

そして保は最後に、「以上は僕等の筑波行の概略だ。ただ、廻（まわ）らぬ筆の、楽しくも亦豪壮だつた其の時の状の、百分の一をも寫（うつ）し得ぬのを憾（うら）みとする。」と総括し、

「五軒茶屋に寝た晩は實際愉快だつた。僕等大いに浩然の氣を養うべき必要あるものは、時にこんな事を企てるのは最も宜（よ）いことと思ふ。」

「僕等は遂に成功したのだ。此の拙（つたな）い文の中からもこの一行の意氣といふものを汲んで貰へれば大いに本望だ。」と結んでいきます。（ふりがな・注は、筆者補筆）

現在は「歩く会」へ

その後、五年生の修学旅行が大正4（1915）年から箱根方面で、そして大正11（1922）年からは京阪神方面で実施されるようになると、それに併せて四年生以下が筑波登山をするようになりました。しかし、京阪神方面への修学旅行が、昭和15（1940）年の「聖地巡拝旅行」で最後となり、修学旅行そのものが、昭和16（1941）年の「香取・鹿島方面剛健自転車旅行」で最後となると、筑波登山も行われなくなりました。

戦後、土浦一高が発足すると、昭和24（1949）年に校内マラソン大会（第1回は本校へ藤沢八坂神社間往復、後には様々な区間）が始まり（昭和43年まで）、昭和44（1969）年からは「歩く会」（第1回は筑波風返峠から本校まで）に衣替えされて、現在まで続いています。今も生徒達は、諸先輩方同様に、筑波の峰を仰ぎ、健脚を競っています。（高21回卒松井泰寿）

余録 映画「天心」ロケが本校日本館で

岡倉天心を描く映画「天心」（主演竹中直人）ロケが、昨年12月に旧本館玄関前（文部省美術展会の入退場シーン）と市内「霞月楼」（宴会場シーン）で行われました。ここにはエキストラとして、本校関係者及びそのご家族あわせて24名の皆様方に出演協力を賜りました。ありがとうございました。上映開始予定は今年9月。